

〒260-0031 千葉県千葉市中央区新千葉2-17-6
サンコート新千葉102号

サンコート新千葉102号

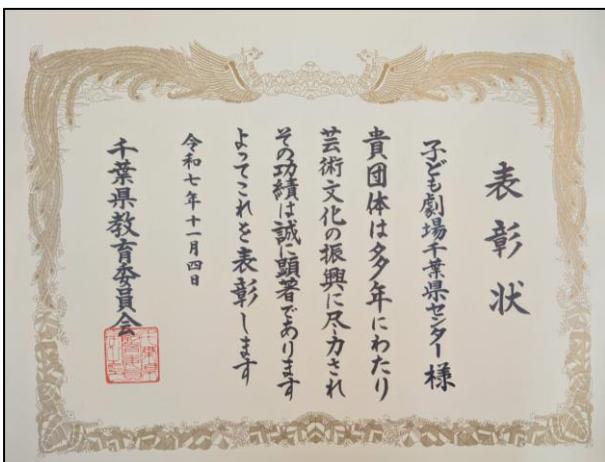
E-mail: kidchiba@lily.ocn.ne.jp

TEL:043-301-7262 FAX:043-301-7263

発行責任者：特定非営利活動法人 子ども劇場千葉県センター

2025年11月10日発行 第110号 1部100円 <https://chiba.geki.jou.org/>

総務課



令和7年度 千葉県教育功労賞 団体表彰

「千葉県内の子どもの成長発達を保障する生活文化環境を創る」ことをミッショングに掲げる子ども劇場千葉県センターは、11月4日、芸術文化の部で「千葉県教育功労団体」として表彰されました。芸術の力は、愛着形成や非認知能力を醸成し、子ども自身の中にある「生きる力」を引き出します。

表彰式に臨んだ宇野理事長は「子どもたちの笑顔に元気をもらい、支えられて長く続けられた。これからも、千葉県・市町村のこども計画の一端を担うNPOとして、自信を持つて実践していきたい。」と抱負を語った。

文化芸術が子ども達の成長と幸せに必要な欠かせないものだと、子どもの周りに豊かな人垣（人のつながり）を築いて参ります。

A woman with short dark hair, wearing a white blouse and a blue cardigan, stands outdoors holding a large framed certificate. The certificate is gold-colored with black text. She is standing in front of a building entrance with glass doors and windows. To her left is a modern building with a light-colored facade and overhanging eaves. The text on the banner behind her reads: 令和七年度 教育功労者表彰式式場

受賞を受けた理由 評価された点

病院・児童福祉施設に入所している子どもたちを対象としたワークショップや、千葉県内の小学校・特別支援学校に芸術家を派遣し講演・実演を行う「芸術家の派遣事業」の実施を通じ、子どもたちが文化芸術に触れるとのできる環境づくりに尽力した。また、平成9年に千葉県芸術文化団体協議会に加盟し、本県の文化芸術の振興に寄与した功績は大である。

いじめ認知件数最多 10/29文科省公表

いじめの認知件数が、前年度比 5% 増の 76 万 9,022 件と過去最多を更新。心身に深刻な被害が生じている恐れがある重大事態の発生件数は同 7.6% 増の 1,405 件で、こちらも過去最多となつた。

内訳

■ 小学校が 4 万 6562 件(前年度比 22 件減)と全体の 85%を占めた。他は中学校 7031 件(同 174 件増)、高校 979 件(同 119 件増)、特別支援学校 152 件(同 2 件減)。

■児童・生徒 1000 人当たりの認知件数は 102・7 件で全国平均の 61・3 件を大きく上回った。

■文部科学省が1月22日に公表した2024年度の「問題行動・不登校調査」で、小中高と特別支援学校でのいじめの認知件数が過去最多を更新したことが判明した。

千葉県内の公立学校（小中高校など1283校）のいじめ認知件数が前年度から269件増えて5万4724件となり、過去最多を更新した。

県教委は認知件数の増加について、コロナ禍の行動制限で対人スキルを身につける機会が少なかつたことが一因として考えられる」と指摘。さらに、学校が「重大事態」への発展を防ぐため、ちよつとしたトラブルもいじめと認知していることが全体を押し上げる要因だ。



『子どもがのびる！「非認知能力」～人生を豊かにする力を育む～』

日時：2025年9月13日 会場：さわやかちば県民プラザ 令和7年度「ちばアカデミア講座2」

講師：千葉大学教育学部 中道圭人教授

ノーベル賞経済学者ヘックマンが「幼児教育の経済学」で提唱した「非認知能力」。最後に「貴重なのは金ではなく、愛情と子育ての力なのだ」と記しています。講座の中では、人との関わりやあそび、生きる力にまつわる言葉がとびかいました。0歳からの子育て支援活動、子どもの芸術的・社会的体験活動が、「非認知能力の獲得」の場になることに確信をもてた講座でした。

(レポート・文責：買場)



■社会情動的（非認知）能力の構成要素 (OECD「家庭・学校・地域社会における社会情動的スキルの育成 2015）

「非認知能力」とは何か？なぜ、注目されているのか？⇒非認知能力は「現在」と「未来」の豊かさにつながるからです。「人の心」や「社会性」に関わる能力＝非認知能力（社会情動的能力）これには3つの力があります。

	キーワード	具体例
目標を達成する力	自己制御	自分の行動をコントロールする力
	目標への情熱	見通しを持ち、目標に向かっていく力
	粘り強さ	最期までやり抜く力
他者と協働する力	社交性・協調性・社会的スキル	人や社会とうまく付き合える力 お互いに譲り合って調和を図れる力
	思いやり・共感	相手の立場や気持ちを理会する力
	敬意	相手を敬い、尊重できる力
	自尊心	自分を大切にできる力
情動を制御する力	自信・自己効力感	自分の能力や価値を信じる力
	楽観性	前向きな気持ちを持てる力

認知能力と非認知能力は、相互作用しながら、乳幼児期から、人生にかけて連続性を持って発達する。突然育つわけではない。スキルがスキルを生む。だから0～2歳児期、脳が爆発的に育つ時期が大事。

お気づきでしょうか？これらは舞台芸術を通して、子どもへ届けたいアーティストの思い、私たちの願いと重なります。世界中の研究から、子ども期の社会情動的能力の獲得が、人間関係、学び方、働き方、結婚、子育て、老年期の孤独や人とのつながり等人生のすべての Well-Being に長期的な影響があること、さらに、「非認知能力」は家庭、社会（保育園や幼稚園、地域社会）が補い合いながら育てていけることが、明らかになってきました。



「非認知能力」に係る世界の研究がすすんでいます



✿1946年のイギリスで、3月の1週間に生まれたすべての赤ちゃんの生涯を追跡し記録する〈出生コホート研究〉がスタートした。妊婦の権利と医療の向上等様々な研究や施策に寄与している。親の事情が子どもの事情に長期的な影響を及ぼす、と同時に不利な境遇を抜け出す道が確かに存在することを明らかにしている。親が子どもと話をする、子どもに読み聞かせをする、子どもの将来に夢をもつ、といった単純なことが、不利な出発点にともなう困難の、全てではないにしても一部を改善するのに役立つ可能性がある。

（「ライフ・プロジェクト～7万人の研究からわかったこと」著者：ヘレン・ピアソン）

✿ACE研究(子ども期の逆境的体験の生涯にわたる影響)

(ACE : Adverse Childhood Experience)

ACEs は 18 歳までに経験する虐待、ネグレクト、家庭内暴力、親の精神疾患や依存症、貧困、親の離婚や死別など、心身に悪影響を及ぼす可能性のある有害な体験の総称。外的環境の重要性として、子どもの発達に悪影響を与える、大人になってから的心身の健康問題や社会的な問題につながることが研究で明らかになっています。

✿ボストン貧困街出身者とハーバード卒業生の追跡調査から、社会情動的能力は良い人間関係・老年期の Well-Being に関わる要因。（「THE GOOD LIFE」～幸せになるのに、遅すぎることはない～著者：ロバート・ウォルディンガー、マーク・シュルツ）



✿幼児教育への1ドルの投資は社会への7～8ドルの利益になる。
(2015年著書「幼児教育の経済学」著者：ジェイムス・J・ヘックマン)



愛着は、「応答的コミュニケーション」から生まれます



■なぜ、乳幼児の育ちが重要か？

0-6歳頃は、身体はもちろんのこと、認知・情緒の基盤となる脳の回路を形成する時期だからです。覚えていなくても、いろいろと身体・脳に染み込んでいます。脳は最初の5年で成人の90~95%まで急成長します。

(新生児約400g→1歳児で約900g2倍、5歳児で約1200g3倍)人生最大の変革期である乳幼児期「成人期には生じない」シナプスの量の増え方のピークがこの時期。記憶に無い乳幼児期こそ非認知能力の脳内基盤が作られる。(抑制、ワーキングメモリ、切替といった実行機能)

■どのように、子どもの「非認知能力」を育むのか？

ヘックマンの「ペリー就学前計画」で用いられた質の高い幼児教育（ハイスクープ就学前教育プログラム）とは・・子どもと大人が「対等なパートナー」として活動に参加し、かかわり合い、学びを深めていく「アクティブ・ラーニング」。ハイスクープの教室では、あそびの活動中に大人から一方的に知識や指示を与えることはない。子どもたちは、自分自身の興味・関心を追求することでもっともよく学ぶからです。子どもたちは、対等な関係にある大人のサポートを受けながら「なにであそぶか」「だれとあそぶか」「どこであそぶか」「どのようにあそぶか」を、自ら決定し、意思表示し、主体的に行動し振り返る。周囲には、受容的で応答的な態度の大人が存在しています。

■非認知能力を育む様々なカリキュラムの共通点、脳の土台をつくるポイントは?

- 自分で活動や遊びを選択　・計画を意識化（やってみたい事を意思表示する）　・自分の考えた活動・あそびをやりきる　・自分の活動・あそびの状況を振り返る
 - 大人の「応答性（優しさ）」と「統制性（厳しさ）」の両立。
 - 生活習慣…睡眠時間が長い子は、海馬（記憶領域）が大きい。実行機能が向上。運動習慣で前頭葉の活性、など。
 - 応答的対応が脳を育てる「サーブ＆リターン」赤ちゃんの「サーブ」：赤ちゃんが泣く、笑う、身振りで関わりを求めています。大人の「リターン」：養育者が優しく抱っこしたり、語りかけたり、アイコンタクトしたりサインに応えます。このやり取りが繰り返されると赤ちゃんの脳には、神経細胞のネットワークが繋がり、神経回路の高速道路が作られていきます。温かいまなざしや声かけが、赤ちゃんの脳を育む最高の刺激です。オムツ替えや授乳、お風呂といった日常のルーティンこそが、応答的な関わりを実践する絶好のチャンスです。



赤ちゃんの研究で面白い報告もあります



板倉昭二氏（同志社大学赤ちゃん学研究センター長）

赤ちゃんは、2か月くらいから人とそれ以外を区別する。人はコミュニケーションとるもの、物は操作するもの・されるものという認識がある。赤ちゃんは自分に注意が向いているかどうか、わかる。自分とやりとりしてくれる相手、人との関係性をつくるため、持っている能力をいかんなく発揮する。けんかしている、邪魔する、助ける、善悪や人間同士の関係性、家族、先生などもわかっている。子どもの育ちをみんなに理解してもらえて、赤ちゃんをすごくリスペクトするようにながついていけば嬉しい。板倉昭二×浅野泰昌対談【ベイビーシアターは関係性のアートだ！】より

西川ひろ子氏（安田女子大学 教授）
赤ちゃんは人の顔が大好きで表情もわざわざする。笑顔が一番好きで一生懸命見てまねをする。7か月位までに、抱きしめておしゃべり話だけでなく、話しかけ微笑みかけてくれる人に愛着形成する。赤ちゃんや赤ちゃんを育てている家族には微笑んでいただきたい。

【「アンパンマン大好き！」が5歳で「ダサイ」に変わるワケ】文藝春秋PLUS公式チャンネルより

今日も明日も一人で子どもに向き合う時間、寝不足、孤独、体は復調しない、疲れて孤立無援、子どもにイライラをぶつけたり。眞面目に理想を追う親ほど、自分を責めたり。相談してほっとする、赤ちゃんと離れて自分の時間が持てる、リフレッシュしたり癒されたり、そういう時間はもちろん大事で保障されなくてはなりません。

子どもにウエルビーリングを届ける取り組みは、親に子育てのウェルビーリングを届ける取り組みでなくてはならない、といえます。

子どもにウエルビーイングを届ける取り組みは、親に子育てのウエルビーアイデアを届ける取り組みでなくてはならない、といえます。

講座に参加してのコメント

市町村担当者の「こども計画」への「おもい」を取材！

「こども計画」策定に関わった行政担当職員が、「子どもの権利条約」の理念を、自信を持ってしつかり語っていた。「主役・主体は子ども」の具体的な姿やイメージを描いて、うれしそうに・誇らしそうに子どもたちの声等を聴かせてくれた。行政と市民NPOとの共通の言葉と概念が、子どもの権利条約の理念に立った「主役・主体は子ども」「こどもまんなか」となったことを、実感した取材だった。「こども計画」を「絵にかいた餅にしない」と、実効に向けての意欲が高く、子どもの未来に希望を託して施策をすすめていた。



～子ども・子育てを取り巻く課題解決は待ったなし！ こども計画を 絵にかいた餅に しないために～

君津市こども政策課 坂井さん

【主役・主体は「どもである」と「うがむ」

念が貫かれ、「ことども計画」全体がすべての理念から発想し、書き込まれている。

策定理念→基本目標→施策の展開・事業計画→ことどもの意見聴取結果と計画への反映→成果評価へと、明確に簡潔に記載してある。市町内でも横断的に「ことども計画」を推進していくよう動き、多くの権利約束の学習会も市町内で取り組む等、P D C Aサイクルで動いている。

特に力を入れているのは、ことどもの意見を聴くこと。策定期の意見聴取のテーマは「自分が楽しい！幸せだ！」と思うときには「皆が辛さなくなるところに居聿川がどんどん



「まちにこもる」といってはいけないと思われます。まちになつてほんない」と、幸せ感の聲を聴いた。幼児は絵で、小学生は社会科体験会の現場に出向き、中学生は市内合同生徒会で意見交換をした。高校生以上の若者たちがそれらを整理分析してまとめ市長に提案した。事業計画では「…ども、若者会議、…ども、若者の居場所づくり、きみつ☆…ども、わかもものアイディアバンク」等を通じ、「…どもの声を聴く取り組みを続けています。「肝心なことは意見を計画に反映し、「…ども」に「イードバックすることです。」坂井さんは明るく明快に、こととも計画の実効に突き進んでいた。

子どもの権利条約の理念が貫かれ、担当職員は財政措置を獲得にも力を注いでいた。こども条例の策定が計画されている。計画の実効に期待したい。

袖ヶ浦市子育て支援課



市庁舎1Fの市民交流スペースには、15時以降、高校等若者が集まっている訪問した日も3人の女子が待ち合わせとかで談笑していた。

（袖ヶ浦市子育てプラン3期）を策定した。（令和7年度～11年度）子育て支援の方針を定め、基本理念として、「家庭」「地域」「行政」の三者が協働して、安心して子育てができるまちを目指す。切れ目のない、誰一人取り残さない、地域全体で支える視点を基本的視点としている。駅周辺・蔵波地域は子ども連れ家庭が多く引っ越してきて、市内の公・私立保育園等は7か所から15か所に増え、これまでハード面に力を入れ、待機児童ゼロの子育て支援を充実してきた。

今、令和8年度から11年度の4年間の、子ども基本法に基づく「子ども計画」を策定中。子ども・若者が主役、こどもまんなかの施策をすすめる。8月には高校生以上の若者でワークショップを実施した。教育委員会等各課からもテーマや知恵や工夫を集め、全序的に取り組んでいく。新しくなった市庁舎は、ギャラリーや市民交流スペースが設けられ、市役所機能とともに、地域の人々が集い、つながりを持てるよう、との配慮がされている。

子どもは社会の未来です。子どもが幸む「ハジメもまんなか」にすると、大

社会の未来です。子どもが幸せになることを否定する人はいません。「こどもまんなか」にすると、大人と子ども・人と人が心地よくつなが

成田市こども未来部こども政策課



子どもの意見を引き出すのに苦労、ファシリテーターの存在は大きかった。全庁あげて子どもの権利条約と計画を共有していると、やった感の笑顔だった。

市原市こども未来部こども福祉課

策定にあたっては実施したアンケート調査の意見を踏まえ、2つの重点取組を設定する。重点取組1（仮称）子ども条例の制定、重点取組2（仮称）子ども・若者の居場所づくりとした。

★ 基本的な視点の一つとして、「子どもの権利を尊重する」を掲げ、「（仮称）子ども条例」を、子ども・若者の意見を取り入れながら制定する。

★ 子どもの居場所づくりは新規事業を2本立ち上げた。単年度要求で、子どもの居場所づくり事業（1500万円）

★ 子どもの学びの選択肢確保事業（3000万円）

子ども・若者が地域コミュニティの中での安心して育つことは、自己肯定感を高め、社会的なスキルや人間関係を築く力を養い、将来にわたって幸せな状態（ウェルビーイング）で成長するために重要な認識に立つての施策。

府内で「こどもまんなか」の意識の醸成や、子どもの声を聴き取る仕組みづくり、地域資源の把握、地域連携等々、事業を実施しながら、行政がすべき財政措置で支援し、計画を実現していく。

部子ども家庭課



子どもの権利条約を周知する取り組みが丁寧にされている。子どもの状況を本で変えていこうという意気みを、担当職員から感じた。



「子どもは未来」と言い切り、取材した日は高校生と少子化問題を話し合うそうで、楽しくワクワクと、業務や計画をすすめていた。

も政策課

大事にしたのは「子ども総約」を書くこと。子どもの権利条約の「」子ども最も利益」を最重要視点にしてた。アンケート調査、ワークショップで「子ども・若者の声を聞いた。

ワークショップに参加した高校生から24歳までの若者が中心になり、「成田市こども未来政策委員会」が立ち上がった。今年9月には、国際空港を持つ成田市ならではの事業を委員会として提案した。子どもや委員たちには成田が好き、成田に住み続けたいと願っていた。そんな若者たちが考えた事業名は、中高校生向け職業体験「目指せ、成田はえぬきworker！」訪日観光向けのマナー啓

「なか」に「ど」を加えて、より子どもを中心いて考えていく思いを表現している。ヤングプラザミニアムセンターを、子どもたちの居場所にする計画があり、若者から声を聴き取った。「寝るスペースがほしい」「静かに勉強し、教え合うスペースがほしい」等が出され、施策に反映し、結果をフィードバックしていく。

計画の周知はタブレットへ配信、子ども版「すくすくざくら」は四コマまんがでわかりやすく表現し、クイズ形式で「子どもの権利条約などとき」を発行した。教育、交通、防災など、子どもに係るテーマを庁内各課から募っている。5年後の目標設定では、子どもの自己肯定感を高めることを実現していきたい。

一方で目標実現に不安もある。出生は700人、少子化、共働き率も高く、生活環境が激変している。実現を阻む要因が多くあつても、子どもと一緒にやることで切り開けると希望をもち、誠実に向き合っていた。

「（子ども）は計画」の立ち位置が、これまでの支援策と全く違っている。「（子ども）若者」といっしょにつくるというスタンスに変わった。子どもも1人ひとりを人として尊重し、「（子ども）が主役」という理念が貫かれていることが計画の柱だと説明。子どもの権利部会は、子どもの権利主本の立場から、子育てにつづつ、当事者によ

子どものきもち

両方を受け止めることで
見えてくることがある

親のきもち



第1弾 不登校・行き渋り



子ども劇場千葉県センターでは、18歳までの子どもの声を聴く「チャイルドライン千葉」と、養育者の声を聴く「ママパパラインちば」の2つのラインを開設しています。今号では、コロナ禍以降小・中・高校で全国的に増え続ける「不登校・行き渋り」を、子どもの声と養育者の声から拾い集めてみました。学校に行かせたい親の気持ちと、学校に行きたくない子どもの気持ちは背中合わせのようで、すれ違いや噛み合わないもどかしさがあります。子どもと親との両方向から気持ちを捉えてみると、親子間で理解し合えることや、気持ちが安定するよりよい方向に向かう道など、見えてくるものがあるのではないでしょうか。

子どもの話を聴く＜チャイルドライン千葉＞には、なぜかわからないけど学校に行けない、行きたくないといった声を多く聞くようになってきました。そんな自分を責め、つらく苦しいきものは誰にも言えないと話してきます。様々な思いが複合的に重なり合い、孤独の中で生きづらさを感じている子どもの姿がみえてきます。

子どもが学校に行きたくないというのは、“わがまま”なのでしょうか。子どもは親の気持ちもよくわかっていて、だからこそ苦しみ、それでも行きたくない・行けないです。話せる人はいる？ときいて、しばらく考えて「いない」と返ってくることも多いのです。



養育者の話を聴く＜ママパパラインちば＞には、子どもの不登校や行き渋りに、「なぜなのか？」原因や理由が分からず悩み心配し、子どもを思い、なんとかしなくてはと奮闘するも、理解者、共感者を得づらく、先の見えないトンネルを、孤独に歩む自分に疲れ、耐え切れなくなっているのです。親も悩み葛藤し、分かり合えないまま心身共に疲れて、親子の関係性がギクシャクしている様子も伝わってきます。

学校へ行ってくれれば親としては安心、だから何とかして子どもを学校に行かせたいと思うのは当然です。最初から子どもの気持ちに寄り添って、わかったような対応ができる親はいません。「そんなにイヤなら学校に行かなくてもいいよ」と、本心から子どもに言えるまで、葛藤し苦しみ、孤独の渦中にいます。家族が孤立しないことを支える社会を願います。

子どもの諸課題の社会発信をします

子どもや養育者の声は「個人の弱さや問題」として捉えられがちですが、経済的な問題、ひとり親家庭などの家族形態の変化、地域での人間関係の希薄さ、学校のあり方など、個人の努力だけでは解決できない、地域や現代社会が抱える様々な課題も透けて見えてきます。

「学校に行けない、学校に行ってくれない、これって私だけが悪いの」と孤独と葛藤のなかにいる、子どもや親の声を地域や社会に伝え、理解を広げていくことは、こうした声を聴いているNPOとしての大切な役割でもあります。そして、地域の方たち、関係団体、機関と何ができるかを、ともに考える場、機会も創りたいとも考えています。子育て中の親の孤立を支え、子どもの成長を見守ることのできる地域、社会になるよう、受け止めた様ざまな気持ちを、これからも広く発信していきます。

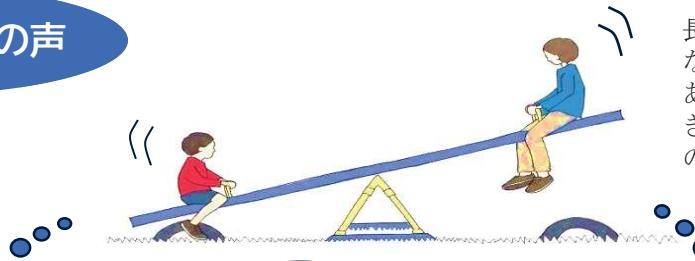
～令和6年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」より抜粋～

項目	令和6年度	令和5年度	増減
暴力行為の発生件数	8,209件	7,263件	946件増加
いじめの認知件数	54,724件	54,455件	269件増加
小・中・義務教育・中等教育学校不登校児童・生徒数	14,599人	14,300人	299人増加
高等学校不登校生徒数	3,178人	3,108人	70人増加
中途退学者数	951人	999人	48人減少

不登校児童生徒数は、過去最多となったものの、増加率は、小・中学校いずれも前年度と比較して低下している。不登校児童生徒数のうち、新規不登校児童生徒数は、小・中学校ともに前年度から減少し9年ぶりの減少となった。

参考<統計> 《千葉県教育委員会 令和7年10月29日》

交差する親と子の声



長期に渡る不登校状況と、不登校になるのでは？との行き渋り状況があります。どちらも気持ちが揺れ動き、親と子がシーソーをしているかのようです。

◆先生が嫌で学校を休んでる。行きたくなくても行ってる子はいるのに。休んでしまう自分はいけない子って思う。

◆とくに何があったというわけではないけど、朝、涙がでたり、お腹が痛くなったりする。学校という存在自体がいやなので、保健室登校とかも考えられない。

◆今日は、学校を休んでゆっくりしてた！悲しかったり、辛かったり、嫌なことがあつたりで少し嫌になっていた。お母さんは「しようがないな」って思ってくれたみたい。

◆「不登校はゲームをする権利はない」と言われ、ゲーム機を取り上げられた。親には反論できない。逆らえない。不登校の僕が悪いんだけどね。

◆親は妹ばかりをほめて、自分は怒られてばかりで、辛くて、もう死にたいぐらい、毎日がツライ。不登校だけど、受験勉強は頑張っている。

◆学校に行かなきやと思うが、体が動かない。「なんで行きたくないのかな？」と聞かれるけど。夏休みで少しホッとできている。

◆受験勉強中。高校に受かったら、休み時間に友達と喋ったり、部活したり…何の変哲もない学校生活を送りたい。でも、また不登校に戻ってしまったら…

◆中学3年生の9月から学校に行き始めた。集団生活が苦手で。今は、別教室で小学生レベルのプリントをやっている。高校に入ってもついていけるのかなあ…

◆学校に行けなくて、よくないと思っている。吃音症なので、小学生以上にコミュニケーションが求められる中学校生活がつらい。先生は理解してくれてるけど。

◆先生が苦手で嫌い。学校に行くと頭痛や吐き気がして苦しい。お母さんには上手く理由が言えなかった。消えたい。今の学校、行きたくない…

◆行き渋りで朝のドタバタがいやで疲れてしまう。学校のことは給食や休み時間以外は話してくれない。早く自分でやれるようになって欲しい。

◆いじめが原因で行き渋りになり、席を離す配慮をしてくれて今は、登校している。親もADHDで、子どももこだわりが強く言うことを聞かせようと、ついつい乱暴な口調になってしまう。

◆子どもが発達障害。父親が子どもを無理やり連れていった時の家は地獄のようだった。今は話し合いにも積極的に参加している。頑張って学校側との話し合いをしてこうと思う。

◆子どもが不登校。1人は保健室に毎日連れて行っているが、くたびれる。あと2人は一時スクールに行っていたが、今は家で昼夜逆転、ゲームをしている。学校に行かなくてよい2人をずるいと思っているのではと思ってしまう。

◆幼稚園時代から行き渋りがあり、説き伏せるのに時間がかかりとても疲れる。夏休み明けに行き渋りが出たらと思うととても心配。

◆夫は私の気持ちも理解してくれ、先生や義母も寄り添ってくれている。でも子どもが不登校だった時の辛い気持ちがよみがえり、不安になってしまう。

◆孫が「先生が嫌い」と不登校。母親はいかなくともいいというが私はとても不安。学校に行つてほしい。でも、私の話には耳を貸さない。

◆行き渋りの小学低学年の登校を毎日一緒にしていて早くスムーズにいけるようになってほしい。笑顔で楽しく学校に行ってくれることが目標だが毎朝送るのはとても大変。ゆっくり休みたい。

◆高校に合格したが不登校で通信制に入り直し。学校、病院、出会う人は無理解で力になってくれず、孤軍奮闘。母の望みは高卒資格を取り同年代の若者と楽しく過ごしてほしいこと。

子ども文化最前線

ウェルビーイングな夏休み！～子どもも、周りの大人も笑顔いっぱいの会場になる～

2025年度子どもゆめ基金助成事業 「病院や児童福祉施設の子どもが主体的に創造しワクワクするQOL向上あそび交流 2025」



■千葉県こども病院

「つくってあそぼう！夏休み工作！」

とき：8月14日（木）

10:00～12:00

ところ：1階ロビー図書コーナー

参加者：子ども 34人 大人 19人



2019年の夏休み以来、コロナ禍とその後の面会制限が続いたが、この夏休み中、直接こどもたちと出会って遊ぶことが6年ぶりにかなった。夏休みのこども病院は、定期的に受診する人、手術のための検査や術後のケアをしてもらう人で、朝から多くの子どもたちが来院していた。

★手作りプールの中にクリップつきの魚、カニ、たこ、カメなどに幼児さんたちがすぐに興味を示し、つり始めた。父母と一緒に「うまい！つれたつれた！よかったですね～」と声があがった。

★「ゆらゆらへびさん」は、渦巻きを書いた色画用紙にクレヨンで色塗り。頭部分に糸と棒をつけて振るとゆらゆら生きているようで嬉しそう。受診に行った男児は両親ともどり2匹のカラフル、キラキラのへびさんを嬉しそうに受けとった。

★じっくり制作した小学生は「フェルトのバッグチャーム」で、30分取り組んだ。リボンやフェルトを鮮やかに飾り、裏面まで飾り、満足そう。

★動物おりがみにきた幼児とパパ。基本の折を角を合わせるところまでパパがやり、「ピターっと折って！」と声かけるとこどもが張り切って指先を使って折る。指にはめてピヨコピヨコと楽しそうに動かしていた。

★拍子木で始まった「ねずみちょうじや」の朗々とした語りに、子どもたちは見入り、場外の待合室のおとなまで、興味深そうに聴いているようすだった。



保護者からの感想

* 「いつも飽きてしまうが、今日は思い出ができた！」「またやりたい！」

* 「検査結果の後で落ち込んでいたが、楽しい気持ちになれた」

■千葉県千葉リハビリテーションセンター

「たのしクインテットとわくわくサマーコンサート」

とき：8月27日（水）

①10:30～11:10

②13:30～14:10

ところ：大ホール

参加者：子ども 86人 大人 59人



今年も6人の演奏者から構成される「たのしクインテット」のコンサートだった。「ずっと楽しみにしてましたね！」と担当者からの挨拶で会場の雰囲気も大いに盛り上がり、前列の幼児たちは好奇心いっぱいの顔で目がキラキラになった。演奏者が挨拶すると「よろしくお願ひいたします」と元気良く答えてくれた。

どの曲も手を叩いたり、楽器を鳴らしてリズムをとり、知っている曲の時は音に合わせて体を動かしたり、足をバタバタさせ、嬉しい表情をした。楽しそうにリズムをとって、持参した太鼓の玩具を持ち、習ったリズムをノリノリで打っていた。時々隣の子と目を合わせて嬉しそうにしていた。

歌えないけれど、にこにこ顔でマラカスをもった手を振り上げて体を動かした。手に持っていたおもちゃのギターをまるで演奏しているように弾いていた子がいた。室内が暗くなり電飾がつき始めると「あ～っ！」と驚き、空間の変化や天井にうつる光を目で追っていた。

ペットボトルマラカスをマイクのように持って歌っていた。「楽しかった～」「良い思い出になりました」「また来てね」の感想とともに、たくさんの拍手をおくっていた。



編集後記

令和7年度千葉県教育功労賞団体として表彰され、大きな励みと共に今後も子ども諸課題を解決していくNPOであり続けたいと思っています。折しも10月、いじめ認知件数最多・不登校児の増加等が文科省から公表され、改めて「子どもの最善・主体」に立ちもどり、安心・安全な居場所がある社会、辛さや苦しさを抱えた子どもや養育者に寄り添える社会になることを願います。

(綿貫)